




審査結果の要旨

報告番号	乙第 2858 号	氏 名	徳田 諭道
審 査 担 当 者	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 主 査 山田研太郎  </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 副主査 佐島 将康  </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 副主査 山下 裕史朗  </div> </div>		
主論文題名： 妊娠中の血漿デスアシルグレリン濃度とインスリン抵抗性に関する検討			

審査結果の要旨(意見)

グレリンは成長ホルモン分泌促進作用, 食欲調節作用だけでなく, 多彩な生理作用を有しており, インスリン分泌やインスリン抵抗性との関連も報告されている。本研究は, 正常耐糖能および耐糖能異常を有する妊婦の血漿デスアシルグレリン濃度を測定し, 正常耐糖能妊婦と耐糖能異常妊婦でデスアシルグレリン濃度と血中インスリン, 血糖, およびインスリン抵抗性との関連が異なることを示した。デスアシルグレリンは不活性型グレリンとみなされてきたが, 近年それ自体がアシルグレリンとは異なる生理活性を有することが報告されている。本研究は妊娠糖尿病に関する新たな知見を提示するだけでなく, グレリンの糖代謝における意義を解明する上で有益であり, 臨床的意義のある論文と考えられる。

論文要旨

グレリンはヒトの胃より抽出・発見されたペプチドホルモンで, 成長ホルモンの分泌促進作用を有し, その他にも多彩な作用を持つ。糖尿病との関連も報告され, 正常成人ではグレリンとインスリン抵抗性に強い負の相関を認めるが, 妊婦では相関を認めない。このことから, 妊娠中のグレリンとインスリン抵抗性との関係は, 非妊時と異なると予想される。このため, 妊娠中の糖代謝, 特にインスリン抵抗性に注目し, グレリンが妊娠中の糖代謝に及ぼす影響を検討した。正常耐糖能 (NGT) 妊婦群 (n=15)、耐糖能異常 (AGT) 妊婦群 (n=11) に対し, 早朝空腹時の血漿デスアシルグレリン濃度, 血中インスリン濃度, 血中グルコース濃度を測定, インスリン抵抗性 (HOMA-R) を算出して検討を行った。デスアシルグレリン濃度は, NGT妊婦群とAGT妊婦群の間に有意差を認めなかった。デスアシルグレリンとインスリン, インスリン抵抗性は, NGT妊婦群では弱い正の相関を認めたが, AGT妊婦群では強い負の相関を認めた。耐糖能異常妊婦では非妊婦同様にデスアシルグレリン濃度とインスリン抵抗性に負の相関が認められたが, 正常耐糖能妊婦ではデスアシルグレリンと濃度インスリン抵抗性に相関は認められず, 妊娠時の耐糖能の変化が関与していると考えられた。